社団法人 日本図書館協会 図書館学教育部会

会　　報　第23号

昭和62年 3月10日発行　編集・発行 図書館学教育部会

― 裏田武夫会長追悼号 ―

部会長の御逝去を悼んで

今　まど子

昨年11月24日，図書館学教育部会長の裏田武夫先生が此の世を去られました。急な訃報に接し部会幹事一同呆然といたしました。

本部会が昭和34年に設立されて以来，部会長を失ったことはありません。まして現役の部会長が亡くなられたのは初めての悲痛なことでございます。

先生は第9期（昭和50年11月～52年3月），第13期（58年4月～60年3月）及び第14期（60年4月～62年3月）の3期を本部会の部会長及び日本図書館協会の常務理事として勤めて下さいました。

昭和60年3月に東京大学を停年退官され福島大学に移られた時に，これからは時間的にもゆとりができるからとのお言葉に，我われはＩＦＬＡ東京大会を控え，海外と比較しても我が国の図書館員養成のレベルはとても高いとは云えず，またコンピューターの図書館への導入により，図書館の在り方やサービスが大きな変化に直面している現在，そこで働く図書館員の知識や技術，質そのものが問われているこの時期に，日本図書館学会の会長でもいられた先生に図書館・情報学教育改善のためのリーダーシップを取って頂くことを強く期待しておりました。

しかし，60年の夏頃入院されたとの報が入りましたが，秋になると幹事会にお顔を見せて下さり，12月の幹事会の後は忘年会をしようと幹事一同と焼肉屋に行き，皆に肉を取り分けて下さり乍ら，先生お得意の話術で，海外旅行の話を面白おかしく聞かせて頂き大笑いで過した一夕でした。その時，一年後に先生はもう此の世にいらっしゃらなくなるなんて誰が感じたでしょう。

御遺体のそばに座り尽くして，先生の多岐にわたる御関心と知識が一条の煙と消え去ることを惜しみ悲しい気持で一杯でした。

昭和29～30年，私が慶応大学図書館学校の学生であった時，先生は和書分類目録法を教授しておられました。その時からの教え子の1人として，また部会幹事の1人として会報23号を先生の追悼号とし，御霊前に捧げさせて頂きます。

尚，追悼号として先生の略歴及び業績として多数の論文の中から図書館学教育に関するものを中心に選び，続いて12月1日芝増上寺における御葬儀の時に捧げられた日本図書館協会理事長の弔辞，更に部会長経験者，古い友人，教え子の方々より哀悼のお言葉をお寄せ頂きこの追悼号を飾ることができまして感謝いたしております。

故 裏 田 武 夫 教 授 略 歴

大正13年12月 8 日	新潟県に生れる
昭 和 24 年 3 月	東京帝国大学文学部 教育学科卒業
昭 和 26 年 3 月	東京大学大学院文学研究科修了
昭 和 27 年 7 月	米国イリノイ大学大学院 図書館学校修了
昭 和 28 年 4 月	東京大学教育学部講師
昭 和 31 年 12 月	東京大学教育学部助教授
昭 和 39 年 1 月	ユネスコ専門委員
昭 和 46 年 5 月	東京大学教育学部教授 （図書館学講座主任となる）
昭 和 46 年 6 月	世界保健機構（WHO） コンサルタント （インドネシア駐在）
昭 和 56 年 4 月	東京大学附属図書館長
	東京大学情報図書館学研究 センター長
昭 和 60 年 3 月	東京大学停年退官
昭 和 60 年 4 月	福島大学教育学部教授
昭 和 60 年 5 月	東京大学名誉教授
昭和61年11月24日	逝　去　　（享年 61才）

≪学会および社会における活動≫

昭 和 44 年 4 月	科学技術会議専門委員
昭 和 46 年 10 月	社会教育審議会専門委員
昭 和 56 年 4 月	国立大学図書館協議会会長 国公私立大学国際連絡委員会委員長
昭 和 58 年 1 月	学術審議会専門委員
昭 和 58 年 4 月	日本図書館学会会長
昭 和 58 年 4 月	日本図書館協会常務理事
昭 和 58 年 8 月	国立婦人教育会館運営委員
昭 和 60 年 6 月	医学情報委員会委員

（主な活動に限定）

此の日、三十年にわたる東大の
授業終りて　独り行く
裏田武夫

昭和60年 1 月30日 最終講義の日に
よめる一首

業績 ― 図書館学教育を中心に

単行書

• 「学校図書館実務・資料図解大事典」　全国教育図書　1967.　（渡辺茂男他監修）

• 「図書館法成立史資料」　日本図書館協会　1968.　（小川　剛共編）

• 「戦後フィリッピン書誌」　東南アジア医療情報センター　1975.

• *Medical and Health Libraries in Southeast Asia.* 東南アジア医療情報センター　1977.

• 「戦後インドネシア書誌」　東南アジア医療情報センター　1979.

単行書の一部

• 社会教育施設論＜海後宗臣他共編「社会教育の再編成」（講座　教育社会学　8）＞　東洋館出版社　1957.

• 青年の読書の特質―読書指導の理論的基礎づけのために―＜宮原誠一編「青年の学習―勤労青年教育の基礎的研究」＞　国土社　1960.

• 図書館学研究の視点＜武田虎之助先生古希記念論文編集委員会編「図書館と社会」＞　日本図書館協会　1970.

• 司書の養成と研修　（社会教育職員の養成と研修―大学における養成（研修）と教育の課題）＜横山宏編　「社会教育職員の養成と研修」（日本の社会教育　23）＞　東洋館出版社　1979.

• 序論―問題提起のために―＜日本図書館協会編「図書館法研究―図書館法制定30周年記念・図書館法研究シンポジウム記録」＞　日本図書館協会　1980.

論文・評論

• 学校図書館法　「教育」vol. 3, no. 10, 1953.

• 司書養成の問題点　「図書館界」vol. 5, no. 4, 1953, 12.

• 専門図書館員の養成　「びぶろす」vol. 5, no. 7, 1954, 7.

• 政治意識と図書館人―道標―「図書館雑誌」vol. 49, no. 4, 1955, 4.

• 学校教育における図書館教育「英語教育」vol. 8, no. 8, 1961, 3.

• 司書教諭講習について―おもいつくままに―「IFEL図書館学」no. 7, 1962, 10.

• 第2回国際医学図書館会議　Session I　医学図書館員の教育と養成　「医学図書館」vol. 10, no. 4, 1963, 8.

• 図書館員の社会的役割―その巨視的側面から―「図書館雑誌」vol. 60, no. 6, 1966, 6.

• 医学図書館員教育―現場をもつ科学の立場から―「医学図書館」vol. 13, no. 2, 1966, 6.

• 昭和45年度大学図書館員講習会III　相互協力の推進とその問題点　「学術月報」vol. 23, no. 9, 1970, 12.

• 司書教諭はコーディネーター―本誌論稿にみる学校図書館関係者の発言―「学校図書館」no. 256, 1972, 2.

• 教室から現場へのかけ橋―図書館実習によせて―〔特集：図書館実習〕「図書館雑誌」vol. 70, no. 12, 1976, 12.

• わが研究の回顧と反省「社会教育学・図書館学研究」no. 1, 1977, 3.

• 図書館学教育研究委員会報告　「大学基準協会会報」no. 35, 1977, 12.　（沢本孝久　他共著）

• 今後の図書館学研究の方向―3つの領域をめぐって―「神奈川県図書館学会誌」no. 47, 1979.

• 学校図書館人の資質と資格を考える―学校図書館理論を前提にして―〔特集：21世紀の学校図書館〕「学校図書館」no. 340, 1979, 2.

• 図書館・情報政策の基本問題〔特集：日本の図書館政策への提言〕「図書館雑誌」vol. 73, no. 5, 1979, 5.

• *The Making of Japanese Librarian.* 「社会教育学・図書館学研究」no. 4, 1980, 3.

• まぼろしの東大ライブラリースクール　GHQ文書ファイルにもとづいて―「東京大学情報図書館学研究センター紀要」no. 1, 1982, 3.

弔　　辞

裏田さん ― 日本図書館協会の常務理事として，つい昨日までともに語りあってきた仲間として，こうお呼びすることをお許しください。

裏田さん，あなたは戦後のわが国図書館界を建て直すのに功績のあった蒲池正夫先生の追悼文に寄せて，『またもや館界の巨星がおちた。協会事務局で蒲池さんが亡くなられたのを聞いて，全く突然のことで全身から血の気が去っていくようなはげしい喪失感に見舞われた。本当に頼りにしていた館界の大先達を失ってしまった。』とお書きになりました。この言葉をいま，わが国図書館界で働くすべての人々の気持ちとして，そのままあなたにお返ししなければならなくなってしまいました。

図書館をして，ぬるま湯的独占企業といい，図書館員を純粋培養型職人，まじめではあるが図書館員の会合は議論百出，議して決せず，それでもなお満足せず，次回にまた同じ議論をくり返す，ときめつけたのは裏田さん，あなたでした。

あなたの指摘は的を射ていることはわかっていても，痛いところをあえてえぐり出そうとするあなたに対し，反感をもった図書館員がいたことも事実です。しかし，『私にもっとも共鳴同感を覚える人は，私にもっとも遠い存在であり，私にもっとも反感と違和感をいだく人こそ，私にもっとも近い存在である。』というニーチェの言葉を用いながら，今のままの図書館界であってはいけないのだ。図書館員よもっと大きく深く考えるべきだという警鐘を鳴らし続けてこられました。

これがあなたにとっては自分自身の気持に忠実なことであり，結果としてそれが図書館界に対してのあなたの誠意でもありました。

今よりも常に一歩先を見つめ若い人を育てることが，図書館の発展につながると信じ，高いところからでなく，常に若い人と共に考え歩もうとする姿勢も多くの若い図書館員を力づけてきました。

この若さに対して向けられた目は，また図書館として発展途上にあるアジアの国ぐにに向けられていました。

図書館も他の例にもれず，欧米に追いつけ，追い越せで，すべての図書館員の目が欧米に向いている時に，アメリカで図書館学を学んだあなたが，アジアの図書館をみよ，アジアの図書館から学べ，そして何よりもアジアの一員であることを忘れるなと機会ある毎に主張されてきました。

今年の８月，我が国で最初の，そしてアジアでは１９８０年のフィリピンに次いで２回目の第52回国際図書館連盟東京大会が開催されました。アジアの多くの図書館員がこの大会に参加し，日本の図書館事情を知ってもらえましたし，何よりも多くの日本の図書館員がアジアを含め世界の図書館へ目を向けるきっかけを作ることになりました。あなたに逢えることを楽しみにしていたアジア各国の図書館員にとって，大会会場に裏田さんの姿がないことは，何か大きな穴があいていたような感じがし，寂しさをかくすことができなかったにちがいありません。

しかし，一番寂しいくやしい思いをされたのは，他ならぬあなただったのではないでしょうか。

日本図書館協会の大きな力はもちろんのこと図書館界へ果たしてこられた裏田さんの功績は，筆舌に尽くし難いものがあります。また，今育ちつつある若い芽も今後どれ程大きく成長するかはかり知れないものがあります。あなたの心は，確実に若い人の中に育って来ているのです。理想の図書館への道程は長くても，図書館人の心に灯されたあなたの情熱は永遠に光輝き，受け継がれていくにちがいありません。

裏田さん，本当にご苦労さまでした。どうか安らかにお眠りください。

昭和61年12月１日

社団法人　日本図書館協会
理事長　高　橋　徳太郎

裏田武夫君を偲んで

岡田　温

逆縁という言葉がある。20歳も年下の君のために追憶の文を書かなければならないとは，逆縁という外はない。本来ならば私のために哀悼の一文でも書いて呉れるべき立場の君ではないか。悲しい限りである。

初めて君と出会ったのはもう30年以上も前のことになろうか，その頃君は東大図書館の若き司書であった。敗戦末期の海軍への召集で，特殊潜航艇の命がけの訓練の話を聞かされたことを思い出す。しかし間もなく図書館を去って教育学部の教官に転じた。立法府所属の国会図書館にいた当時の私は，行政府の機関である文部省関係の仕事は出来なかったが，図書館短期大学に移った途端，私は大学設置審議会の図書館学の専門委員を命ぜられた。私大側からは武田虎之助さん，国大側からは私ということであった。その私が図書館短大の任務が終って東洋大学に移った時，文部省の担当官から極めて非公式の形で後任の適任者を聞かれた時，私は何のためらいもなく君の名をあげた。年が少々若いので，その通りに行くかどうかの不安を抱きながらも。その後日本図書館学会の会長，日本図書館協会の教育部会長と，君と私は不思議に同じ道を歩んで来た。しかしそれは名称だけの承け継ぎで，一緒に仕事をした経験は一度もない。

昭和41年頃から数年，彼と共に別府大学での夏期司書講習の講師をしたことがあった。同じ日の午前と午後に分れた講義で，宿舎も深町別荘という静かな住宅地であった。夕方になると庭の芝生にござを敷き，別荘の女主人とその令嬢，そして我ら二人，蚊を追いながら水瓜を食べながら取りとめもない雑談で夜を過した。こんな時の彼は話題も豊富で話術も巧みであったことを懐しく思い出す。昭和43年には彼は小川剛君との共編で「図書館法成立史資料」という貴重な編さん物を刊行している。この時請われるままに私は手持ちの資料若干を提供した。そのためか丁重な礼状と献辞を記した一本が届けられた。

著作嫌いの私は余儀ない事情で丸善から「図書館」という本を出版した。その時丸善は今後続いて図書館関係の本を出したいが，次は誰がよいだろうかと聞かれた。この時も私は何のためらいも無く彼の名をあげて，図書館学概論を書いて貰うことをすすめた。その上に，私と同じように本を書くことをしない彼に本を書かせたら丸善の手柄になるともいい添えた。このことは私からも直接彼に伝え，丸善もこの件を申し入れて彼の了承を得た。しかしついに彼は書かなかった。

それから間もなく彼は東大付属図書館長になった。私は国立大学の図書館長に図書館学専門の教授が任命されたのは初めてだから頑張って欲しいとの祝辞と激励を兼ねた一書を送った。それに対し誇り高き彼としては珍らしく，頑張りますという意味の簡単なハガキが返って来たことを思い出す。以後彼との交渉は年賀状の交換に止まっていた。そしてこの度の訃報である。国立大学という窮屈な枠から離れ，自由にこれからという時，多くの才能を内にひそめたまま逝って了ったのは，彼としても心残りであったろうし，我が図書館界にとっても大きな損失となった。悲しみをこめて，心から彼の冥福を祈るのみ。

裏田武夫部会長の思い出

中村初雄

日本図書館協会は，昭和61年11月24日，有能な教育部会長，常任理事を失った。享年61歳というから，まだまだ働らいて頂きたい年齢である。

慈恵医大病院からは退院されたと聞き，御全快も近いのではと期待していたのに，この訃報，今にも泣き出しそうな空の日，鎌倉の御自宅での御通夜にあがった。

君と私の縁は32年前にさかのぼる。私が国会か

ら慶應に転出した時，君は私の前任者であった。君と私とでは，性格は複雑と単純，訓練の姿勢も厳と寛と全く違っていた。君は早くから責任ある長兄としての立場をとられた故か，早稲(わせ)の方，おくての私は何とか暦上の年長さでお付き合いしてこられた。

故武田虎之助先生は，用語委員会で，君の透徹・精密な言葉の限定のし方と，私の包括的に広げてゆくのを較べながら楽しんでおられるようだった。またダウンズ博士表彰推薦文の起草に際しては"何をもって直弟子と称するか"で議論したこともある。

何年前，どんな席であったかは思い出せないが，私には忘れ得ない君の姿がある。お互いの子女観に触れることになった少人数での語らいであった。その時君は，お子様を火傷させてしまった体験を語られた。練炭火鉢か何かの焔が美しいと，手を入れてしまったアッというまの出来事だったかと聞いた。それが何歳の男児か女児であったかも知らずに，"よくあることですね。子供はそうして育ってゆくものです"と言ってしまった。単純な私は慰さめの言葉のつもりであった。"でもね，幼児の火傷は，ゼッタイに親の不注意ですからね"と君の眼には光るものさえあった。

お通夜の席上，私は君の直弟子2人と言葉をかわした。"先生には医学図書館で厳しくきたえられました。"彼等の眼にも涙が光って見えた。愛情を秘めた厳しさ，そんな言葉を反芻しながら，私は大船行のバスストップに足を向けた。

図書館の歴史とともにあった裏田武夫先生

室伏　武
（亜細亜大学）

この春ごろ，お身体の工合がお悪いと聞いておりましたが，急なご他界の報に接し驚きの念にかられました。まだ会などにお姿を私どもの前に見せてくれるような気がしてなりません。

享年61歳という先生のご生涯は，特に戦後の図書館とともに歩まれた歴史そのものでありました。この図書館の流れにおいて先生は，いつもすぐれた指導者としてわが国の図書館の発展に大きな足跡を残されました。図書館学の理論的な面はもちろんのこと，図書館運動においても先導的な役割を果たされてきました。特に，情報社会という新しい時代における図書館が直面している転機に立ち，21世紀へ向けて大きな飛躍を遂げなければならない重要な時期に，その中心的な指導者である先生を失ったことは，わが国における図書館にとって大きな損失と言わなければなりません。私どもは，こうした時に先生が残された教えをふまえ継承しなければならない責任を感ぜずにおられません。幸に，先生は，多くのお弟子を育成され図書館界の指導者をうんと育てられました。私どもは，よき後継者が輩出するものと信じております。これも先生の学徳のしからしむるところであると思っています。

先生は，昔から俳優の森繁に似ておりました。森繁のように多くの孫たちと囲まれながら，私どもにきびしい指導をいつまでもしてほしかったと切なる思いに心が乱れております。とてもはずかしがり屋の先生は，こんなことを言うときっと苦笑されるものと思います。

先生のごめい福を心からお祈り申し上げます。

合　掌

裏田さんの憶い出

北嶋武彦
（大正大学）

かねがね，裏田さんが健康を害され，入院なさっているということはうかがっていたが，急逝の訃報に接し，同世代の一人として誠に哀悼にたえない。謹んで御冥福をお祈りする次第である。

私が裏田さんと知り合うようになったのはたしか昭和30年頃であったと思う。当時裏田さんは新

進気鋭の研究者としてそのいかにも偉丈夫らしい体軀と鋭い着想力で颯爽と館界をリードしていた頃であった。故武田虎之助先生や故有山　崧さんなどが中心となり，日本図書館学会が発足，当時東大教育学部長をされていた海後宗臣先生が会長で裏田さんは事務局長的役割を果されていた。当時学会の役員をしていた関係で私は海後先生や裏田さんの部屋で顔を合せ，何かと話し合う機会があった。学会の運営方針について裏田さんはしばしば卓抜な着想を発表され，そのつど啓発されることが多かった。

また，当時私は故服部金太郎さんとともに図書館職員養成所教官をしていた関係から，非常勤講師として毎週出講される裏田さん（当時は専門英語を担当され，テキストにPierce Butlerの *Introduction to Library Science* を使用されていたような記憶があり，学生間では遅刻にきびしい先生という評判が高かったように思う）とお逢いする機会が多かった。

研究者としての当時の裏田さんは戦後間もなくRobert Leighが委員長となって実施した公共図書館調査の全体報告書である"*The Public Library in the United States*"やBernard Berelsonの"*The Library's Public*"など，図書館や読者についての社会調査的研究に関心をもたれたようで，その刺激を受けて私もこれらの本を買い込んで読み，新鮮な印象を受けた記憶がある。（数年前，森耕一氏が「図書館界」誌上で，この種の本がもっと日本でも読まれるべきであると書いていたような記憶があるがはっきりしない）

こうした図書館や読書に関する社会調査的研究への関心が後年，朝日新聞社や読売新聞社がスポンサーとなって実施した読書世論調査へ裏田さんや私が参加するきっかけとなった。そして，この世論調査を通し，当時，若手の錚々たる研究者であった竹内郁郎さん（東大新聞研究所），故城戸浩太郎さん（当時東京学芸大学講師で城戸幡太郎氏の御子息）をはじめ，富永健一さん（東大新聞研究所），本間さん（学習院大学）などと近付きを得たことも大変幸なことであった。

あれから30年，当時のことを回想すると若き日の裏田さんにまつわるさまざまな憶い出がつきることなく，次から次へとよみがえってくる。裏田さんの御冥福を重ねてお祈りする次第である。

七七忌をすぎて

後藤純郎
（日本大学）

裏田先生の七七忌をすぎて，あらためて故人の影響の広く，大きかったことを思い知らされる。

先生は東大教授であり，総合図書館長であった。また図書館学会会長であり，さらに本部会の部会長でもあった。すべて責任の重い仕事である。このように表だったポストだけでなく，ほかにも，地味で大変に気ぼねの折れる仕事を沢山に負っておられた。それらはすべて東大教授なるが故に否応なく背負わねばならぬものであった。しかし先生はそれらのすべてに真剣にとり組まれた。私にとって印象深い一例は，人事院の公務員採用試験のことである。

この試験のなかに国立大学図書専門職員の試験がある。先生はこの問題の作成にも情熱を注がれた。専門科目の「五肢択一」の短答式問題を，大学図書館の現場に即応したものに仕上げたいと念願しておられた。先生の作られる設問は，臨場感があり，しかも普遍性をもつ興味深いものばかりであった。古い話だが，数年にわたってお手傳をした。先生の気迫に押されて，私も，ない知恵をしぼったのだが，お役に立つまでにいたらず，今でも申し訳けなく思っている。毎年この問題のうち数題が人事院によって公表される。全国の図書館学担当者はこれに注目し，講義内容と学科目の運営に改善をはかるであろう。図書館学のレベル・アップにつながることが期待できる。それが先生の遠大な狙いであったようだ。図書館学を他の学問分野にひけをとらぬ水準にまで向上させることが先生の終生の悲願であり，先生の地位にある者の責任はその達成に努力することであると信じておられたようである。

東大退官後はこのような仕事も責任も半減した

ことと思われる。永年にわたって蓄積された学識と，天賦の才能に恵まれた語学力を駆使して，われわれや後進のために一層の業績をあげて下さるものと期待していた。しかし天が先生に与えたものは，2年にみたぬ歳月であり，それも闘病の日々が多かったことは心痛むことである。

裏田君 ― いつものとおりそう呼ばせてもらおう ― がまだ都内にお住いのころ，同君の提案で，お互に家族的なつき合いをしようということになり，奥様や，まだ幼なかったお嬢さん方をつれて，藤川正信君の御一家ともども，私の家の新築祝いに来てくださったのは30年も昔のことになる。3人とも，いずれも子供は娘ばかりというのも奇縁だった。

裏田君の特技といえばその能筆ぶりである。左手に巻き紙を持ち，右手の筆に墨をふくませて，さらさらと一気に手紙を書き上げる図は歌舞伎の一場面でも見るようだった。個人的な交友の思い出は尽きない。

裏田君や私の世代は，かつて戦火のなかを生きのびて，再び学窓にもどることを許されたという経験をもっている。そのときには戦場に散った学友たちの分まで勉学せねばと誓ったものであった。その世代の私たちが，今度は，同じ学問の道を歩む友人たちからとり残されてゆく立場になってきた。私たちは裏田君の遺志を継いで学界の前進，発展のために努力しなければならない。その責任は重く，しかも私たちに残された歳月も決して多くはない。その思いが痛切に胸に迫る昨日今日である。

裏田君の思い出

高橋重臣
（図書館情報大学）

病状が思わしくないとは，かなり前から聞いていたが，突然の訃報に接して驚いた。再起の日を期待していたのだが。福島大学での抱負など元気に語っていたのは，つい先き頃のことなのに。

裏田君と初めてあったのは，いつのことだったか。多分司書教諭講習が始まったばかりの頃，後に図書館短期大学の校舎になった元の東京学芸大学の校舎で，文部省の主催によるシラバスづくりのような研究集会の席ではなかったかと思う。思い起せば，それに先立って最初の司書講習が終った頃，やはりシラバスの交換かなにかのことで文通があって，初対面の時から，互いに腹蔵なく論議をかわす仲になっていた。

司書課程発足の頃は，なんといっても文献不足 ― 京都のＣＩＥからごっそり借りることも出来たが ― 慶応のＪＬＳの図書室，国会図書館，そして当時ＡＬＡから図書館学関係の資料を大量寄贈された東大図書館学資料室にはしばしばお邪魔したが，その頃は永峯光名さんがご健在で，裏田君をわずらわすことはあまりなかったと思う。特に親しくなったのは，6ケ月の内地留学で東大に世話になった昭和35年頃からであった。

それから大分たって，東大教育学部に大学院がおかれたばかりの頃，たまたま日図研のセミナー講師として奈良に来られた裏田君を拙宅にお招きしたところ，当時ＪＬＳ卒業直前の愚娘に進学をすすめられたが，結局研究生として一年お預けすることになったのも，奇妙な縁であった。

しばらくインドネシアにいった彼が，あちらで図書館をさす言葉が「本の庭」を意味するとかで，本のいれものや館という図書館と異って，屋根や建物を考えない図書館，つまり図書館の機能を力説したのは，当時まだ耳新しい議論であったことなど，いまは懐しい思い出である。

裏田先生へお願い

友野玲子
（共立女子大教授）

裏田先生に最後にお目にかかったのは，いつだったでしょうか。昨年の日記を開いてみました。同僚の小山助教授，卒業生の下村陽子さんとの三人で慈恵大病院の御病床にお見舞したのは，7月

19日(土)の午後でした。

御病室の前で奥様にお目にかかり，「今日は調子がよろしくないのです」とのお言葉に，私たちは一瞬たじろぎましたが，ベッドまで御案内いただきました。かつてのお元気そのものの裏田先生はどこへ行ってしまわれたのでしょう。その日の御体調のせいもありましたでしょうが，弱々しいお顔つきと，上掛けから出しておられたお手にも生気は見られませんでした。私は思わず先生の右のお手を握りました。でも「握手」というにはあまりにも私から一方的なごあいさつだったようでした。先生はほほえまれ，私たち三人をお見分け下さいました。この上お疲れになってはと考え，ほんの2～3分で失礼いたしました。廊下でうかがった先生の御病状が「一時はどうなるかと……」と，涙と共に絶句された奥様をおはげましする言葉が見つからなかったのも事実です。

12月1日再び，御成門で下車しても，それは慈恵大病院とは反対の道の増上寺山門をくぐり，先生とのながのお別れの日でした。悲しいかな図書館界は大きなリーダーを失いました。命を司どる仏様が先生を御病苦からお救いになったのだと思いたいのです。でも私たちからは早すぎた御他界と見えるのです。

楽しかった思い出の一つは，先生を団長として，図書館関係の方二十数名で1980年3月，10日間にわたる中国（北京・武漢・上海）の図書館見学をしたことでした。各図書館で団員を紹介なさる時も，ユーモアを交え，各種のまとめ役にも名団長ぶりを発揮されました。上海の復旦大学で「次は友野玲子さん。彼女は武漢大学のバッジをつけていますが，学生ではありません。バッジは大学からいただいたものです」といった調子。おかげで私たちは復旦大学からもバッジを頂戴できることになりました。

帰国の成田空港で，荷物の調べのため，スーツ・ケースを台にのせようとしたのですが私にはうまくのりません。反対側にいらした裏田先生にお手助けを願いました。「その細腕では ― ，いいですよ。はいっ」軽々とのせて下さったのです。先生をお送りしてしまった今，先生がおのこし下さった多くの論説・論文・エッセイ等等，そして個人的にいただいた御指導など，改めて大切にして，前向きに行きたいと自分に云いきかせております。「裏田先生，お静かにお休み下さい」と申し上げるのが常識かもしれません。しかし，御病苦から解き放された裏田先生には，「多くの問題をかかえている図書館で，私が壁にぶつかる時，成田空港の時と同様，ひょいと，たくましいお腕で，遠いところからお助け下さいますよう」というのが私の虫のいいお願いでございます。

合　掌

裏田武夫先生を偲びて

高　橋　和　子
（相模女子大学）

昨年11月25日午前中の講義を終えて研究室に戻ったところで，同僚の渋谷さんから「裏田武夫先生が亡くなられました」と告げられ一瞬わが耳を疑いました。

先生は私どもの大学にとって，図書館学の生みの親であり育ての親とも申し上げるべきお方でありました。折しも昨年は本学が図書館学を開講して4半世紀を経過したことで，その25年の歩みをまとめ，春先には先生にお届けし現況をご報告申し上げようと予定していた矢先の訃報で，ぼう然とするばかりでありました。

先生は昭和35年10月から15年間の長きにわたり，司書課程をその草創期から成人を迎える目鼻が立つまでの期間を見守って下さいました。初期の実習では東大医学部図書館にお世話いただき，数回にわたるカリキュラム改正では適切な助言を，時には大学執行部にもご進言下さるなど，課程の充実と発展にご協力をいただきました。当時は私自身も奉職間もない頃で，大学首脳より今度図書館学講師に東大で若くして助教授になられた方が出講下さるので，万事において粗相のない様にとの連絡を受け，大いに緊張したものでした。肩書きが東大の先生と言うことで，いかめしい方と思いきや，風呂敷包みを小脇にかかえられて，〝今日

は”と実に丁寧に頭を下げられご挨拶下さいましたお姿は，今も私の脳裏に焼きついております。以来，先生の本学での15年間をご一緒させていただく栄に浴したわけであります。

先生ご出講の日はいつも研究室に見えられそこがお仕事の場であり，時には談話室ともなりました。ここで学生を個別指導下さったり，当時はまだ十分でなかった研究室の専門図書を使われて，人事院の図書館専門職の試験問題を作成されたり，ある時は図書館界を嘆かれ，また風呂敷文化論（先生は大の礼讃者で紺と白の木綿風呂敷をいつもお持ちであったと記憶します）から発展して，外国出張の折のエピソードと色々ありました。先生のお話はどこかにジョークがかくされていて，いつも感心させられたものです。ではいつも雑談ばかりしていたのと言われそうですが，ご専門でも色々ご教示下さり，『図書館法成立史資料』「明治・大正期公共図書館研究序説」等数々のご論考もいただき，殊に後書は図書館学に関心を持ち，中でも図書館史と言っても当時は作家と図書館と言う観点からの興味でしたが，この方面では石井敦先生の著書もまだ発刊されていない時代で，私にとっては学ぶ上での基本的な資料となったことも忘れられません。この文献は今でも読むことがあります。

また後年はごく少数の職場の仲間で，親しみをこめて”裏田ちゃん”と呼ばせていただいたこと，中国旅行，鎌倉のお宅での先生との思い出はつきませんが，総じて先生はソフトな中にも厳しい一面をお持ちで，そして何よりも博識でいらっしゃいました。図書館界の大先達を失った淋しさは筆舌につくしがたいものがあります。裏田武夫先生のご冥福を心からお祈りします。

師のお言葉

菊池　しづ子
（学習院女子短大）

師のことばというものは，ちょっとした一言一言が，生徒の方にとっては，忘れられないことばともなり，一生を決めるものともなるものなのでしょう。裏田先生は，多方面で活躍され，お忙しい方でしたので，私のような一学生は，なかなかゆっくりとお話する機会は多くなかったのですが，私のこの十数年は，先生によって導かれたものでした。

大学院に進んだのも先生の一言によるものでしたし，出産直後に就職するという幸運も先生が下さったものでした。院生の頃，ひどく狭苦しいアパートに居ることで愚痴をこぼした折，先生は，「研究者は，金銭的には恵まれないことを覚悟しなければならない。」といったことを何気なくおっしゃいました。就職の際は，大変喜んで下さって，「これで少しは生活も楽になるだろうし，給料をもらうからには，アルバイトなどやめて，仕事を全うするように。」といった内容のことをさとされたものです。また，「女の子ばかりの短大だから，暴力的な学生運動などないだろうからお父さんも安心だろう。」と笑っておっしゃった時は，何で唐突に父親が出てくるのかとおかしいと同時に，先生が，私の生活や，私の親のことまで，いつの間にかよく理解しておられることがうかがえて，ありがたい気持でいっぱいになり，頭の下る思いがしたものでした。

以来，挫折しそうになること度々でしたが，先生のおことばを思い起しては，やっとこの道にしがみついてきたようなものです。先生は亡くなられましたが，その思いは一層強く感じられるこの頃です。

昭和６１年度 図書館学教育部会総会記録

日　時：昭和61年５月30日　10～12時
場　所：日本図書館協会 会議室
出席者：木原通夫，信田昭二，森耕一，石塚栄二，林収正，塩見昇，鳥居美和子，弥吉光長，増井照貢，古賀節子，高山正也，渡辺信一，渋谷嘉彦，今まど子　以上12名，委任状19通　部会員総数166名
議　長：森　耕一
議事録署名人：木原通夫，鳥居美和子

議　事

(1) 昭和60年度事業報告（幹事）
(2) 昭和60年度決算報告及び監査報告（渋谷幹事）
(3) 昭和61年度事業計画
　a) 第52回ＩＦＬＡ東京大会への参加
　　今年度は夏期研究集会を中止し，ＩＦＬＡ東京大会第Ⅶ教育と研究部会への参加を呼びかけていく。
　b) 全国図書館大会（東京都）
　　総合テーマ：ＩＦＬＡ東京大会をめぐって
　　日　時：昭和62年３月20日
　　場　所：青 山 会 館
　　第６分科会テーマ：図書館員の養成と研修
　c) 第15期役員選挙
　d) 会報発行（第21，22号）
　e) 部会員増加への働きかけ
(4) 昭和61年度予算
(5) その他
　a) 部会長長期療養の場合の措置
　　部会長代行の選任を含め幹事会に一任する
　b) 会員名簿の維持管理を改善する
　c) 部会規約改正
　　その必要があれば，会報に掲載して会員の意見をきく

昭和60年度 決算報告

収入の部　（円）

費目	予算	決算	備考
会費	297,000	223,000	
交付金	150,000	150,000	
雑収入	1,000	17,527	
繰越金	245,475	245,475	
合計	693,475	636,002	

支出の部

費目	予算	決算	備考
事務用品費	20,000	21,610	
会合費	60,000	35,250	
通信費	50,000	27,360	
交通費	200,000	129,000	
会報等印刷費	80,000	143,800	
研究集会等費	110,000	93,000	
雑費	173,475	5,123	
合計	693,475	455,143	
収支差額		180,859	

昭和61年度 予算案

収入の部

費目	予算	備考
会費	306,000	2,000×170×0.9
交付金	150,000	
雑収入	1,000	
繰越金	180,859	
合計	637,859	

支出の部

費目	予算	備考
事務用品費	10,000	
集金費	5,000	
会合費	40,000	
通信費	60,000	
交通費	180,000	
会報等印刷費	120,000	21号，22号
研究集会等費	80,000	
選挙管理費	60,000	
予備費	82,859	
合計	637,859	

第52回 IFLA東京大会

第Ⅶ部会

教育と研究

今年度は例年の夏期研究集会を中止し，折から開催されるIFLA第Ⅶ教育と研究部会に部会員の参加を呼びかけた。

部会の構成

分科会：理論と研究
　　図書館学校とその他の養成機関
ラウンド・テーブル：図書館史
　　図書館雑誌編集
　　読書研究
　　専門職員の継続教育

プログラム

8月25日(月) 部会会合
ヘイズ，R：研究図書館の情報源に関する戦略的計画
松田智雄：21世紀の図書館学
8月26日(火)
分科会会合：図書館理論と研究(I)
増田米二：図書館に対する情報社会のインパクト
桜井宣隆：情報社会の図書館に及ぼす影響 ― その象徴的現象
分科会会合：図書館学校とその他の養成機関(I)
テーマ：21世紀へ向けての図書館員養成
ロチェスター，M.K.：21世紀へ向けての図書館員養成 ― 外国留学
ヴァリエホ，R.M.：21世紀のための図書館員養成：第三世界を背景にして
リー，W.M.：ハイテク情報時代への挑戦 ― 中国における図書館・情報学の最近の動向
藤川正信：図書館員の教育養成に及ぼすテクノロジーの影響
分科会会合：図書館学校とその他の養成機関(II)／ラウンド・テーブル：専門職員の継続教育(II)合同討論会
発表者：シェルドン，B.
応答者：松村多美子ほか
ラウンド・テーブル：読書研究(I)
ステルマック，V.：ソ連における青少年の読書に関する研究プログラム
ユアン，P.G.：中国における読書研究の新たな成果
リンデン，R.：読書心理学
8月27日(水)
分科会会合：図書館理論と研究(II)
テーマ：研究の最近の動向
ペン，F.Z.：中国における学術研究のための図書館
ガソル・デ・ホロウィッツ，R.：情報活動の三次元的性格
ラウンド・テーブル会合：図書館史
岡崎義富：日本におけるヨーロッパ言語の図書収集の歴史
河井弘志ほか：日本における図書館史研究の現状と課題
ラウンド・テーブル会合：図書館雑誌編集
ルージー，M.：アメリカの高等教育における電子出版の動向と展望
岩田弘和：ニュー・メディア特にCD－ROMについて

International Friendship Luncheon for Library and Information Science Teachers

8月26日(火)に来日中の世界の図書館情報学者を招待して，本部会員が中心となって友好昼食会を開いた。外国人28名，日本人43名合計71名もの参加者を得てなごやかに昼食を取り，大変好評であった。場所は東邦生命ビル31階のオスロというレストランである。

参加者

（海外）

Australia	Patricia Layzell Ward
	Fay Nicholson
Austria	Edith Fischer
Canada	C. Donald Cook
	Anne M. Galler
	Nancy Williamson
Denmark	Jorgen Swane-Mikkelsen
Korea	Sung-Ha Lee
	Byung Mock Rhee
Netherland	Ruud A. C. Bruyns
	Paul Nauta
	Adriaan Staats
	Wiana Van Den Ingh
New Zealand	Guen Gawath
Norway	Torild Alnaes
	Tor Henriksen
Philippines	Rosa M. Vallejo
Thailand	Wit Thapthiang
U. K.	William Anderson
U. S. A.	Ching-Chih Chen
	Josephine Riss Fang
	Guy Garrison
	Robert L. Gitler
	Jean Lowrie
	Mathilde V. Rovelstad
	Robert D. Stueart
	Pauline M. Vaillancourt
	Robert Wedgeworth

（国内）

浅野十糸子，石田俊郎，石塚栄二，伊藤松彦，稲川薫，岩猿敏生，上田修一，牛島悦子，岡崎義富，小倉親雄，大城善盛，河井弘志，漢那憲治，菊池しづ子，木野主計，草野正名，国分信，小山郁子，阪田蓉子，志保田務，管原通，須藤美奈子，高橋和子，団野弘之，友野玲子，長倉美恵子，長沢雅男，中村初雄，中村泰正，浜崎邦子，浜田敏郎，林収正，深井耀子，藤川正信，細野公男，前島重方，弥吉光長，有倉久雄，古賀節子，今まど子，高山正也，渡辺信一，渋谷嘉彦

昭和60年度 図書館学教育部会 幹事会活動記録

（会報第20号より続く）

昭和60年12月6日　於 日図協

（裏田，今，古賀，渋谷，渡辺）

(1) 昭和60年度全国図書館大会第7分科会講評の件

(2) 図書館関係雑誌にみられる図書館学教育関連記事の講評

昭和61年3月3日　於 日図協

（裏田，今，古賀，渋谷，高山，渡辺）

(1) 図書館学教育部会規約改正の件

(2) 全国学校図書館協議会主催「図書館学担当大学教員集会 ― 第4回 ― 」の講評

(3) 会報特集号編集の件

4月14日　於 日図協

（今，古賀，渋谷，高山，渡辺）

(1) 会報特集号の編集

(2) 昭和61年度への継続事業の検討

(3) 会計報告原案の作成

5月17日　於 日図協

（今，古賀，渋谷，高山，渡辺）

(1) 会報特集号の発送

(2) 図書館学教育部会総会議事次第の決定

(3) 昭和61年度事業の検討

(4) 昭和61年度予算案の作成

7月19日　於 青山学院大学

（今，古賀，渋谷，高山）

(1) 図書館年鑑執筆者の選定

(2) 昭和61年度図書館大会への対応

(3) ＩＦＬＡ東京大会における図書館学教育部会主催昼食パーティーの企画・実施細目の検討

9月29日　於 日図協
（今，古賀，渋谷，高山，渡辺）
(1)　昭和61年度図書館大会の概要
テーマ：21世紀へ向けての図書館員養成
発表者：桜井宣隆，松村多美子
司　会：今まど子
(2)　第15期役員選挙管理委員会の構成
(3)　図書館学教育部会規程の検討

11月10日　於 日図協
（今，古賀，渋谷，高山，渡辺）
(1)　図書館学教育部会名称の検討
(2)　昭和61年度図書館大会実施細目検討
時間配分
コメンテーターの決定
(3)　第15期役員選挙の選挙人名簿原案整理
(4)　会報発行内容の確定

12月8日　於 日図協
（今，古賀，渋谷，高山，渡辺，常盤）
(1)　選挙管理委員の承認
(2)　第15期役員選挙の選挙人名簿の確定
(3)　昭和61年度全国図書館大会の発表について
(4)　裏田部会長追悼記念会報の編集発行について

会　員　消　息

（会報第20号以降）

＜新入会員＞
小清水芳郎氏（奈良県立橿原図書館）
佐伯　信男氏（金沢大学大学教育開放センター）
柴田　正美氏（三重大学）
萬里小路 通宗氏（大阪青山短大）

＜異　動＞
安部　垂己氏　聖徳学園短大へ
田沢　恭二氏　神戸大学附属図書館へ
常盤　繁氏　東洋大学社会学部応用社会学科へ
戸田　光昭氏　姫路独協大学図書館へ
内藤　衛亮氏　学術情報センター（組織変更）
林　収正氏　女子聖学院短大へ
村田　修身氏　米沢女子短大へ

＜退 会 者＞
利田　正男，後藤　二郎，工　一夫，萩沢　稔，平賀　増美，北条　正韶，山崎　武雄

＜訃　報＞
中沢　保氏（早稲田大学図書館）は1986年9月13日逝去。中沢さんはいつも部会の研究集会に参加して下さいました。もうそのお元気そうなお姿がみられないのは残念なことです。
裏田武夫氏（福島大学）は1986年11月24日に逝去されました。

＜長期留学＞
平野英俊氏　カリフォルニア大学バークレー校
86年8月～87年3月
石川徹也氏　カリフォルニア大学ロスアンゼルス校
87年2月～12月

編 集 後 記

会報第22号は役員選挙人名簿になりましたので，会報第23号を続けておとどけいたします。この号は御覧の通り，裏田武夫部会長の追悼号になってしまったのは悲しいことです。

昨年の3月に，会報特集号として「東アジアの図書館員養成」を出しましたが，これを会報21号とみなしていただけますようお願い申し上げます。会報の通し番号を間違えました不手際をお詫びいたします。　（今　まど子）